この架空の大地で

キリト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この架空の大地で

【Ｎコード】
Ｎ０９４２Ｒ

【作者名】
キリト

【あらすじ】
まぁ、あれだ。
死んだ筈の俺の異世界での現実（いま）へと
帰る為の仮想現実（にせもの）の世界での冒険記録だ。

序章―俺と『俺』

初めまして、俺は…まぁ、自己紹介は後にして常々俺が思っている事を話させて欲しい…

先ず「俺は『俺』ではない」という事だ。

頭がおかしい？いや、そうじゃなくてこれが一切合切嘘のない事実なんだな

さてと、それを説明する為に少し時間を逆上ってみますかね。

――――２００６年○月×日

これについては俺が思い出せる事は何一つないのだが記しておかなければならない。

あ？何故か…だって？それは、この日が…

『俺』が生まれたらしい日だからさ。

――――２０１０年

さてと、時間は四年が経過した。

ん？さっきの事も含めて何がどうなっているのか説明しろって？分かってる分かってる、今から始めるよ。

先ずは俺が『俺』じゃないって所か？簡単に言うなら俺は生まれる前の記憶がある。

つまり、転生とやらをしたらしいな。したらしいってのは死んだと思ったら突然、未来の時間に俺が生まれた事になっているらしいからだ。

なんだが…此所は俺が前に住んでいた世界と大して変わらない

世界はアメリカだってロシアだってイギリスだってあるし大陸は南極に北極だってある。
勿論、俺が住んでる日本だって何ら変わらず存在する

過去の歴史も殆ど同じらしいし（らしいってのは俺の記憶の中の高校程度の歴史を照らせ合わせたからだ）何処かに支配もされていない

まぁ、変わってる事もあったがな。
それの一つが電子機器等の発達率だ…俺が持ってた当時最新型だった携帯なんか最早過去の物になっている
もう一つは俺が住んでる場所だ前は〇〇に住んでいたんだが…まぁ、これは仕方がない。俺は『俺』では無かったんだからな。

序章2―この世界と俺

―――――２０１０年

さて、先程の２００６年は俺がこの世界に誕生した事による記述の為であった。

つまり、この２０１０年にも当然記述すべき事柄があるという事だ。

この年は俺が……『俺』となってしまった人物を殺しちまった年だ。どういう事かというと、この時まで厳密には俺の意識は『俺』の中には無かった訳だ。

それは意識が眠っていた為なのかそれともこの年に俺の意識が入り込んだのかどちらかなのだろうが、俺にはよく分からない…というか正直な所、全く分からない。

とにかく重要なのはこの年に俺は今の『俺』の体に意識として入り込んでしまい、結果それまでの四年間を生きていたであろう１人の人間を『殺してしまった』この事実だ。

俺はこの時に思った…なんで転生なんてしたんだ、なんで…俺に人を殺させたんだと。

転生する前は二十歳だった為に人を1人殺してしまったという現実を受け入れてしまう精神が有り、その日から暫く水以外は何も喉を通らなく、死にたい、死にたくなる…そんな気分を俺は味わったんだ。

あぁ、俺を転生させた存在…神様だか世界だか知らねぇし分かんねぇが…心の底から…恨んでやるよ…

――――２０１６年

あの地獄を味わった日々から6年が経ったこの年、俺は…

『天涯孤独』の身となった。

序章3―出会いと俺と

――――２０１６年

さて…天涯孤独になった俺だが、その前にそこに至るまでの６年間をザッと振り返ってみよう。

あの『俺』を殺してしまってから俺は憔悴していき、それを心配した『俺』の両親は病院へと『俺』を連れて行った。

そこで出された結果は精神的な物であろうという結果だけである。
そりゃあ、そうだ…こんな事実はどうやったって証明なんか出来ないそれにこんな年の子供が言ってもそれこそ、『精神に異常をきたしている。』で片付けれておわりであろう。

そんな俺に『俺』を心配してくれている両親の優しさが俺には痛かった。
だってそれは本来なら『俺』に向けられる物であり、俺に向けられる筈の物ではないのだから…

いっそ全てを吐き出してしまいたい。例えどう思われようが事実を全て話してしまいたい。

何度もそう思ったが目の前で俺を心配して毎日病院まで来てくれている『俺』の両親にそんな事を言い出す事なんか出来なかった…

だから、俺は決めたんだ。俺は『俺』として生きるって、それが『俺』に対して俺がしなくちゃならない償いなんだって…

でも、それは現実を認めたくない俺の現実からの逃亡だったのかもしれない…それでもこの日、俺は『俺』となって生きていく事になった。

1年後には退院したのだが、周囲は奇異の目で俺を見ていた。その原因は入院していたからだけではない。

『先天性色素欠乏症』

これが俺に生まれた時からあった症状の名前だ早い話が白髪赤目の異常な容姿を持って生まれてきた、そういう事だ

そして、一つ言っておこう。

俺も転生する前は人並みに漫画やアニメも好きだった。

だから精神が落ち着き始めた頃に改めて鏡で自身の顔を見た時に驚いた第一声がこれだ。

「ア……一方通行…？」

そう、鏡に映る俺の顔はとある学園都市の最強の超能力者その者の顔であったのだから…

さてと、そんな容姿に加えて頭脳までもまるで『一方通行』になったかの様に冴え渡っており学校の中でも浮いてしまった…

精神的にはかなりキツかった周囲の大人や自分と同じ子供にそんな目で自分が見られる事が…

しかし、そんな俺を両親は普通に接し続けてくれた。
いや、周囲の冷たさから俺を守る様に周囲の子供達よりも遥かに温かな愛情を持って育ててくれた。

……なのに、あの日2人は…俺の両親は『交通事故』という現実にあい死んでしまった。

それから葬式が行われたが、俺は只1人誰も構ってくれないまま泣き続けた。

祖母も祖父も居らず親戚関係者は異常な俺を忌み嫌い表面では悲しんでいるがこんな葬式も『金がかかる』『面倒だ』『あいつはどうするんだ』と影でそんな事ばかり言っていた。

葬式の後、俺はどうせ親戚の家をたらい回しにされるぐらいなら…と、自ら施設に入りその施設でも浮いた生活を続けて、あの日…あいつに出会ったんだ。

「貴方が×××」

「あァ？…誰だァ？」

施設の長い孤独な生活で性格に口調まで
まるで容姿に引っ張られる様に『一方通行』へと変化していた俺の前に現れたそいつを見て俺は固まった

「なッ！？…テメェは……」

「貴方の予想しているであろう人物で私は間違いない…私は対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース…」

俺の目の前に現れたそいつは無表情のままだったが、かけていた眼鏡が光った気がした

「長門、有希。」

俺は目の前にいる俺と同じ様な年齢にはなっているがその独特な雰囲気は彼女の物としか言い様のない雰囲気を出す少女『長門有希』を呆然と見つめた…

序章４―俺と長門と

――――２０１６年△月□日×曜日○時★▽分

「な…長門…有…希……だと？」

俺のこの狼狽が入った呟きとも呻き声とも取れる声に自分の名前を呼ばれたからか目の前の少女『長門有希』は頷く

「そう、私は対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェースの長門有希」

頷いた長門は俺の呻き声に肯定の意を示すべき普通なら舌を噛みそうな言葉をスラスラと話した…って、待てよ？こいつが此所に居るって事は…この世界は…

「ここは…この世界は…あいつが、存在する世界だッてェのか？」

そう、人並みに漫画や小説が好きだった俺は『長門有希』という人物がどういった存在なのかを知っているし覚えている。
特に『涼宮ハルヒシリーズ』は俺のお気に入りだった為によく覚えている。あの作品は『涼宮ハルヒ』を中心として回っており、『涼宮ハルヒ』に振り回されるもう１人の主人公『キョン』そしてその

周囲に『涼宮ハルヒ』の観察の為に『未来人』『超能力者』『宇宙人』の3人がおり、その計5人の団体『SOS団』が様々なトラブルを巻き起こし、巻き込まれる物語だ。

その特殊な経歴を持つ3人の中でも常に一番心強く頼りになる存在である『宇宙人』こと『対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース』それこそが『長門有希』であり、今現在、俺の目の前にいる少女は背格好こそ幼いが雰囲気といい話し方といい、その『長門有希』にしか見えない

しかし、それならおかしい事がある。

「いや…だったら何故…ンな所にいやがる?……それに…なんで子供の姿なンかしていやがる…」

俺は目の前の『長門有機』らしき少女を見て『涼宮ハルヒシリーズ』の『長門有希』の事を思いだし始める。

彼女、『長門有機』は『涼宮ハルヒ』の観察が任務であり彼女が学校に居る時はその高校の所属する教室又は文芸部室におり、それ以外は彼女が1人暮らしをする『マンション』に居る筈なのだ。

つまる所が彼女がもし「長門有希『本人』」であるなら此所に居る筈がないのだ何せ彼女は自分から行動という事を基本的にしない。そして、何より重要なのが今、目の前に居る彼女の容姿だ。

彼女は涼宮ハルヒが後に通いＳＯＳ団を結束する高校に通う前から存在している。
しかし、彼女は後にＳＯＳ団が結束される時と『全く同じ容姿』をしていた筈だ。

当然である『長門有希』という存在は言うなれば『涼宮ハルヒ』を観察する為に『作り出された生命体』と言える存在なのだから『成長過程』等がある筈がないのだ。

「テメェ…本当に長門有希か？」

「それは間違いない」

俺の疑問にあいつは間髪を入れず無表情のままに答えやがった。なので次に気になっていた事を問いただした

「なら…俺がこうなッたのは…この世界に来ちまッた原因は『涼宮ハルヒ』か？」

「それは違う、何よりこの世界には…」

この後にあいつが言った言葉に俺は絶句するしかなかった…

「『ＳＯＳ団』並びに『私以外』の『ＳＯＳ団員』はおろか『涼宮ハルヒ』に…『情報統合思念体』すら存在はしていないのだから」

……おいおい、一体どうなってンだよ？

序章5―俺と神様（憎いあんちくしょう）

「……すまねェ、もう1度言ッてくンねェか？」

「分かった、但し…簡潔に訂正して述べ直す。この世界及びこの世界のどの時間軸にも『私』以外に『涼宮ハルヒ』の居た世界に存在した『人物』も『物』も『何一つとして存在はしない』」

「待て待て待て、待て、おいコラ…」

俺は目の前の長門らしき少女の言葉を聞きこめかみを押さえながら長門らしき少女に疑問の言葉をぶつける

「なンでそうなンだ！！てか！それならなンでテメェは今此所に存在してんだよ！！？」

そう、彼女が言った事が事実であるなら根本的に全てがおかしくなってくるのだから

先ず『涼宮ハルヒ』が居なければ『情報統合思念体』は『対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェース』つまり『長門有希』という存在を作り出す必要性が無くなり目の前の『長門有希』は存在しない筈だ。

そもそもが彼女を作り出した『情報統合思念体』すら存在していないというなら完璧におかしい『涼宮ハルヒの消失』で似た様な事はあったが、その時の彼女『長門有希』は今俺の目の前に居る雰囲気では無かったし、そもそもその様な事態になる為には『涼宮ハルヒ』『情報統合思念体』この二つの存在が無くてはならないからである

つまる所が彼女が言っている事が『事実』だとするなら今、目の前に彼女『長門有希』が存在する筈がないのである

「それは私を生み出したのが『情報統合思念体』ではないから」

「……ンだと？」

「更に言うなれば私は『長門有希』を模した作られた『長門有希』であり、貴方が知る長門有希ではない。」

「んじゃあ…誰がテメェを寄越したッてンだよ」

「それは…」

俺は質問に対する彼女の答えを息をのんで待ち、その瞬間が訪れ俺は…

「女神様」

派手にコケた。それはもう周囲に人が居たなら大騒ぎになりそうな位に派手にコケた

「ざッ…けんなよ！ゴラァアア！！？」

「ふざけてはいない」

「尚更ざけんなァアア！！」

今までのシリアスをぶち壊す様な長門らしき少女の一言に俺は盛大

にぶちキレた。それはもう壮大かつ凄まじい程キレた…

「此所までシリアス続けて引ッ張ッておいて、なンで此所に来てギャグいれンだァあ！？」

「事実なので仕方がない、説明を始めるので手を離して聞いて欲しい」

その言葉を聞き俺は仕方なく掴んでいた長門の服の襟から手を離す

「先ずはこの世界の事を話す。
貴方は忘れているだろうが此所は貴方が此所に来る前に『知っていた』世界」

「ンだと？」

「『涼宮ハルヒ』の居た世界の様に貴方はこの世界の事をある程度知っていたし、その世界だと分かる事実も貴方は何度か目にしている」

長門のその言葉に俺は今まで生きてきた過去や俺の家族、そして俺の今の名前である×××と次々に思い浮かべ更には最近見た新聞やニュースそして人名や出来事、私生活に至るまで片っ端から思い出していくが長門が言う様な心当たりなど全く存在しない

「覚えていないのも無理はない貴方がこの世界に来た時にこの世界の『記憶』は『消された』のだから」

「何？どういう…」

「説明を続ける」

今ある情報だけでは少な過ぎてどういう事か分からない為に俺は長門の話に耳を傾けた

「この世界に貴方が来たのは時空の歪みが原因…ある時にこの世界に本来無かった存在が世界に悪影響を与え始めた。それのせいでこの世界が回りの世界に影響を与える前に初期化し原因を取り除こうとした」

此所まではある程度どっかで聞いた話だな、それで大抵はそれに巻き込まれて死んだ、若しくはその世界の歪みを正してくれって…おい、つまりまさか俺は…

「そう、世界を再生する時に巻き込まれてこの世界に来た」

やっぱりかァああ！！！そんなありきたりな事に巻き込ンでくれたせいでこッちは最悪な子供時代を現在進行形で送ッてンぞォおお！！！

「それについては『ごめん』だそう。」

「軽過ぎンぞゴラァアアア！！！」

今の俺の心境はＶＳ上条戦の時の一方通行なみに高ぶッている

「此所からは、重要な話。
再構成によって歪みの原因は取り除かれたがその時に再びこの世界には本来無い存在が巻き込まれた」

「おいおいおいおい、随分とまァ杜撰な仕事だなァ、おい…で？」

「貴方にこの世界に本来存在しなかった物の『回収』及び『排除』を依頼したい。
再構成に伴い存在しなかった『物』も『人物』もイレギュラーとしてだがこの世界に組み込まれてしまった、今無理に取り除こうとしたりすれば再び歪みが発生する」

なるほど、それで…この世界に同じく組み混まれちまった俺を使う、かイレギュラーにはイレギュラーで対抗しろって事ね

「この依頼を受けてくれるなら可能な限りの援助は行う。それに加えてどの様な願いでも叶える、との事…貴方はどうする？」

言うべき事を言い終えた長門は無表情で俺の方を見たまま動かない…そんな長門に俺は答える

「いいぜ…受けてやるよ」

俺が出した答えは肯定だッた、悪いな『俺』これはお前に対する償いを自身の戒めを破る様になるかもしれねェ…だけどよ…俺はやってやるよ…報酬の願いの為に……俺の願い…『お前』を『俺』では無い『お前』に戻す、その為にな

「そう」

「あァ……それから、一ついいか？」

「何？」

首を傾げる長門に俺は気になっていた事を一つ尋ねようと思い首を傾げる長門を見て髪を掻きつつ質問を投げ掛ける…確信しつつある事柄が外れていて欲しいと願いつつ

「この世界に一番最初に影響を与えたのは何だッたンだ？」

「……涼宮ハルヒ」

やっぱりかァアアアア！！！！

いや、伝言係としてこいつを寄越した時点で何となく予想はしていたが…涼宮ハルヒィイイイ！！！何て事してくれていやがんだァアアアア！！！

「……ンあ？」

俺が涼宮ハルヒに向かッてどうしようもない葛藤を頭の中で叫んでいると話が終わッたからか長門は何処からか取り出したＰＣを弄…ちョッと待て

「おい、あれは……」

長門が本を読む事では無くＰＣをしている事はまだいい…だが、問題なのは長門が装着している『とある物』だ

「まさか、なァ……」

俺は嫌な予感を押さえ切れずＰＣに没頭している長門の背後に回り

ＰＣのディスプレイを見て…

「ウォオオオオイ！！！」

激しく突ッ込まざるをえなかッた長門がしているゲームと耳につけている『兎を象ったヘッドフォン』を見て確信した

（こいつ…『ハルヒちゃん』の方混じッてんのかァあああ！！！）

俺はこの日…一日中脳内で長門を送り出したであろう女神とやらに恨み言を呟いていた

序章６―俺と回り始めたこの世界（前書き）

今回、ヒロイン候補の１人が登場

序章６―俺と回り始めたこの世界

――――２０２１年×月〇日

さッて…長門に会ッてからもう５年の月日が経過したあの後、俺の消された記憶について長門に聞いたンだが

『貴方は最早この世界に組み込まれてしまった存在。だから、あまり知識として未来を知り過ぎると貴方も『排除対象』となってしまう』

と、説明された。
まぁこの世界で俺が関わるべき事に近付いた時に記憶はある程度戻るらしい

因みに長門の奴はというと毎日延々とゲームをし続けていやがるので見つかッたらどうすンだ、と言ッたら…

『このＰＣを中心に視覚障害フィールドを発生させている』

と、言いやがッた…あいつや俺以外には普通のゲームや何かを書いてる様にしか見えないッて事だ…能力の無駄遣い極まッてやがる…つーか俺にも見えない様にしろッてんだ…

ンで、今の俺は移動手段確保の為にバイク免許取得の帰りだ。こッちに来る前の趣味の一つだッたからな…とうとう免許も取得し、バイク屋で中古車を見た帰りッて訳だ…ついでに長門の奴に頼まれたデザート（どうやらあの長門は普通の女の子の様な所もあり甘い物が好きらしい）を買いにコンビニへと立ち寄ると背中に何かが当たり背後を振り向く

「あン？」

「あ、すみません…」

振り返った先には俺より少し年下に見える少女が居やがッた背中には竹刀を入れているであろうケースを担いでやがる…あれが俺に当たったのか

「ちょっ…ちょっと…」

「何？」

俺が竹刀ケースを背負ッた少女とぶつかッた時に落とした籠一杯の缶コーヒー（趣向も一方通行に似てきちまッた）を拾ッているとそれを手伝おうとした少女をその少女の友達であろう数人が少女を呼び止めた

「謝ったんだし、早く行こうよ」

「あの人、何か怖いよ髪は真っ白だし目なんか真っ赤だよ？」

あァ…もう慣れたつもりだッたんだがな何だろうな、未だにこういう事を言われると俺は…

「そう？私はそうは思わないけど…それにぶつかっちゃったのは私だし」

「……ァ？」

そう言ッた目の前の少女の言葉に驚き一瞬だが俺は手を止めちまッた。その間にそいつは俺の籠へ周囲に散らばっていた缶コーヒーを入れ終わる

「すみませんでした、それじゃ」

「あ…あァ…」

そう言って友達の所に歩いて言った少女の後ろ姿を見送り、俺は籠を持ちレジへと向かう途中でミルクティーの缶を『一つ』籠へと突っ込んだ

◇

「おい」

「はい？」

学校からの帰り道で友達と立ち寄ったコンビニ

そこで私は珍しい白髪赤目の人にぶつかってしまった。

私はそうでもなかったが皆が怖いと言うのでそそくさとコンビニから出て歩き出そうとしたのだが突然後ろからかけられた声に私は背後を振り向いた

「よォ」

「あ、貴方はさっきの…」

振り向いた先には先程のコンビニでぶつかった人がコーヒーのみが大量に入った袋と甘いデザートが入った袋をそれぞれ両手に持ち立っていた

「さッきは悪かッたな、こいつは詫びだ取ッとけ」

「っと…あ…」

私を呼び止めたあの人はコーヒーが入った袋を置くとポケットに手を入れ何かを取り出し私に向かって投げてきた、私はそれを鍛えら

れた反射神経により見事に片手でキャッチした。
それはさっき偶然にも私がさっき買おうと思っていたミルクティーの缶だった。

「ま、俺ァ気にァしねェが人を外見でけなすのは止めとけ…じゃあな」

それだけ言うとあの人は置いていた缶コーヒーが入った袋を持ち歩いて行き直ぐに人込みで姿が見えなくなった

「うっ…さっきの聞こえてたんだ」

「でも、律義だし意外と…良い人っぽい？」

「てか、コーヒーは全部ブラックだったしおまけにまとめ買いしてるのに甘い物も買うって…ちょっと変な人ではあるでしょ…直葉はどう思う？」

友達の1人に聞かれたので私はあの人から貰ったミルクティーのプ

ルトップに手を掛けつつ答える

「良い人だと思うよ、私は」

そう言い私は、『桐ヶ谷　直葉』はミルクティーのプルトップを引いた

◇

「あァ…くそ…らしくねェ」

分かッてる自分でもらしくねェどころからしくなさすぎる行動に何だか無償に苛々するッつーか…なんかむず痒い…にしてもだ

「……あんな一言でンな感情になるとはなァ…俺も人間味が残ッてるッて事かァ…」

そう言ッてる間に施設へと着き俺と長門の部屋へと向かうと相変わらずＰＣと睨めっこしていると思っていた長門がベッドの上で体育座りをして待っていた

「お帰り」

「お…おゥ……」

最近分かッたんだがこいつは様々な長門の融合体の様な存在らしく今の様に『長門有希ちゃんの消失』の『一般人である長門有希』の性格が際立って出ている時もあり今回の様に不意打ちである時は思わずドキッとしちまう…

「ほ、ほらよ…」

「あ…ありがとう」

俺はそんな長門に頼まれていたデザートが入った袋を渡す。
次に部屋に備え付きの小型冷蔵庫に買ッてきた缶コーヒーを一本を残し詰め込むと自分のベッドを背に床に座り缶コーヒーを開け買ッてきたゲーム雑誌を読み始める

最近退屈なので面白そうなゲームが無いかと缶コーヒーを飲みつつパラパラと見ていた時にとあるページに書かれていた文章を見て俺はコーヒーを飲む手を止め固まった

「おい……長門…」

「……見つけた…？」

長門の言葉は俺が何を聞こうとしているのか分かッている故の返答だろう…そうか、そういう事かよ……涼宮ハルヒが原因だからだけじゃねェ…『こいつ』がある世界だからこそ『長門有希』だッたのかよ！『長門有希』の能力が最大に発揮される事が出来る…そしてそれが必要になる『こいつ』が！！
この『世界』において全ての『核』になる『こいつ』が！！！

「そういう…事かよ…！！！」

俺の視線の先のゲーム雑誌にある文章…それを読むだけで此所が何処だか…何の世界か俺は理解した…その文章は…

――――２０２２年５月遂に画期的な新世代ゲームハード発売！！
《仮想現実》へと《完全（フル）ダイブ》！！
その名は『ナーヴギア』

この文字を見た時に俺の中にもある程度の記憶が戻った…そう、ここはとある１人の天才が作った機械とゲームを皮切りに始まる《ネット》の中…《仮想現実（にせもの）》の中で人の欲望が蠢く世界…

――『ソードアートオンライン』の世界

序章7―俺と名前と

――――２０２２年

「こいつが…ナーヴギア」

そう呟く俺の手にあるのは漆黒に彩られた流線型のヘッドギア。こいつこそが今、世界に登場した第３世代型にして初の家庭用（フル）完全ダイブ対応ハードであり新世代のゲーム機であると同時に最悪の事件を引き起こす事になる悪魔の機械『ナーヴギア』だ。

長門が言うには俺がやるべき事はこの世界のネットゲームの中に紛れ込み組み込まれてしまった『異物』又は『存在しない筈の人物』の『回収』並びに『保護』……又は『排除』らしい

詰まる所が…俺は知っていながらもこの世界で起こる最悪の精神誘拐事件…ＳＡＯ（ソードアートオンライン）の事件を止める事は出来ないのである…つまり『約一万人』のユーザーに降り懸かる危機を黙ッて見過ごしその内の数割の命を見捨てなければいけねェンだ。

俺は長門からそれを聞き『ふざけンな！！』と長門につかみ掛かッたが長門は悲しげな表情のままそれ以上は何も話しやしなかッた。

俺はそんな長門に何も言えず『悪ィ』と震える声で誤りベッドへ倒れ込ンだ

そんな事があッたあの日から数ヶ月が経つ…そして俺の目の前にも俺が持つナーヴギアと全く同じ物を持つ長門がおり彼女はこれから俺達が完全(フル)ダイブするゲームで使う名前を入力しているのだが…

「そのまンまかよ…」

「え？」

長門の奴はご丁寧に自身の名前をそのまま『ＹＵＫＩ』と入力していやがッた…普通ネトゲで実名プレイはしねェだろォ…

ま、長門の事は放ッておく。
あいつならゲームの中からでも名前を書き換える位は出来るだろうしなァ…あァ？俺はなんて入力したか、だと？決まってんだろォ？

――――『一方通行（アクセラレータ）』だ

序章8―俺と完全（フル）ダイブ（前書き）

今回、主人公が遂に彼と接触！！

序章8—俺と完全（フル）ダイブ

さて、と…ゲームに使うプレイヤー名を設定し終えた俺達は早速『ナーヴギア』を被ると完全（フル）ダイブする為の開始コードを呟く

「「リンク・スタート」」

その言葉と同時に俺達の意識は体を離れ仮想現実へと移行していく。俺達の精神が行く先はまだこれはβテスト版であり本物と違い危険性など全く無い…だが、只それだけ…

俺達が数ヶ月後には約二年の月日を過ごす事になるその仮想現実（にせもの）の世界の名は…《ソードアートオンライン》

———天空に浮かぶ、たった一つの百層の巨大浮遊城（アインクラッド）が存在し己の武器一つで生き残りをかけた…本当の命をかけたデスゲームの名前だ

「……ッと…此所が《ソードアートオンライン》の世界に唯一存在

する城…《アインクラッド》、か」

「そう、なる…」

今現在はまだデスゲームと化していない為に俺達のビジュアルはまるでＲＰＧに出て来る主人公とヒロインの様な容姿…というか、ぶッちゃけ『テイルズオブヴェスペリア』の『ユーリ』と『リタ』だ因みに此所は『エステル』だろ、と言われても長門本人が恥ずかしい、と言ッて拒否しやがッたからなんだが…

「おめェ、今からでも『エステル』みたいな容姿に変えてきやがれ…」

「うっ…え、えっと……」

俺が何故こんな事を言うのか説明するならば『テイルズオブヴェスペリア』の『リタ』について簡潔に説明しよう。

『リタ・モルディオ』それが本名である彼女はまだ少女にしてその世界でも間違い無くその時代では最高峰の知識を持つ少女であり研究者であるプライドからなのか…とても強気な『ツンデレ』である。そりゃあ、もうツンツンしまくりである。

そんな彼女と瓜二つの容姿でモジモジされると確かに『目茶苦茶』

可愛くはあるのだが……

「なンか、スッゲー違和感感じンだよ…」

「うぅ…だ、駄目？」

グハァッ！？て、テメェッ！！その顔で泣きながら必死に懇願してくンじゃねェ！！反則気味に可哀相過ぎンだよォおお！！

「ちィッ…好きにしろォ」

「うん、ありがとう」

ぐァああッ！！！ＤＡ・ＫＡ・ＲＡ！！その顔で感情豊かに笑うンじゃねェええッ！！！

――――デスゲームが始まる前だというのにアクセラレータのＨＰはザックリ削られていくのだった

◇

「しッかし……《フル・ダイブ》とはよく言ッたもンだァ。確かにこいつはスゲェな」

ダイブしてまず最初に現れた町を後にして俺達は草原を歩いて行き遭遇したモンスターを撃退し、俺ァ剣を持つ手とは逆の手を開いたり閉じたりし感覚を確かめていた

「確かにあのハードで意識をこの仮想現実に飛ばすという技術をたった１人で作り上げた…彼は凄まじい」

「あァ、そうだな」

リタの姿をした長門の言葉に俺は頷く。

このナーヴギアを作ッた奴こそがこの後のデスゲーム《ソードアートオンライン》を作り上げた人物であるのだから…いや、《ソードアートオンライン》というデスゲームを始める為に《ナーヴギア》が必要だッた、が正しいのかもな

何せ、一般家庭で使える物でゲーム機型じゃあなきゃ約一万人もの人間をこんなデスゲームに引きずり込めねェからなァ

「さッてと、行くか」

「ん。」

俺達が今すべき事はβテストの内に下層部のイレギュラーを取り除く事だ。そうしなければ下手すりゃこのデスゲームをクリアに導く存在が早々にリタイアさせられちまう。

そう言ッた俺に頷きで答えた長門を伴って俺は歩き出そうとしたんだが…

「なぁ、あんた達」

「あァ？」

背後から聞こえてきた声に振り向くとそこには今の俺達と同じ様にファンタジーゲームの主人公の様なビジュアルをした1人の男性プレイヤーが居た

「なンだ？何か用か？」

「いや、さっきからあんた達の戦闘を見てたんだけどさ、何か他と比べて結構慣れてる感じがしてさ。何かコツとかあるなら教えてくんないかなーって」

「あァ、そういう事か…別にいいぜ？」

「マジで！？ラッキー！！」

そう言ッて喜ぶ黒髪黒眼のプレイヤーに俺と同じ片手剣スキルの発動を指南してやッた…まァ、βテスト参加者は将来大抵は攻略組1人になるだろうしこいつの性格からもそうなるだろォと予想した俺は結構マジで指南していた

「どあっ！？」

「オラ、そンな力任せに振るンじゃなくてだな、こう初動の時にだな」

「こ…こうか？」

「そォだ。後はそのままモーションをだな…」

この男性プレイヤーは俺が思ッてたより飲み込みが早く俺も指南に熱中しつつ共にモンスターを倒し草原を歩いて行ッた。

この分ならこいつは将来デスゲームとなるこのＳＡＯでもトッププレイヤーの１人になるかもしれない…と俺はこの時は呑気に考えていた…

「テメェ中々筋がいいじゃねェか」

「いやいや、あんたの指導のお陰さ…と、そろそろ俺は落ちるわ…の前にフレンド登録しないか？」

「おォ、いいぜ」

あれから暫くモンスターを倒しつつ草原を探索していたら結構時間が経ッちまい男性プレイヤーが落ちるらしいので最後にフレンド登録をする事にした

「？…い…一方…通行？」

「アッハッハッハハハ！！！まァ普通はそう読ンじまうか。そいつは一方通行（アクセラレータ）ッて読むンだよ」

「へぇ…なるほど、んじゃあな。一方通行（アクセラレータ）」

「おう、また明日な」

その言葉を聞いた男性プレイヤーはメニューウィンドウからログアウトのボタンを押し消えた。

それを見た俺は今フレンド登録をしたプレイヤーの名前を見て噴き

出した

「あァッ！！？」

そのフレンド登録の欄には2人の名前しか記入されておらず1人は今も俺の後ろに居る長門の《ＹＵＫＩ》の名前だ。

そしてその下に表示されているのは今フレンド登録した男性プレイヤーの名前だ。

俺に驚愕を与えたそのプレイヤー名とは…

「おいおいマジですかァ…あいつが…」

――――――《ＫＩＲＩＴＯ》

それが俺のフレンド登録欄に表示されている先程の男性プレイヤーの名前だ

つまり、先程の男性プレイヤーこそが将来のこのデスゲームを終結させた未来の漆黒の二刀流剣士

「あいつが、『キリト』…『桐ヶ谷　和人』」

俺はその名前を呟き呆然と立ち尽くした

序章9―俺と出会いとイレギュラー（前書き）

今回遂に主人公がイレギュラーと初遭遇

序章9―俺と出会いとイレギュラー

さて、このＳＡＯのβテストを始めて早くも約一か月が過ぎた。

この一ヵ月の間に分かった事を纏めてみたンだが、どうも既に原作とは違ってきていやがる…一つ挙げるなら

・プレイヤー名を国ごとの設定が可能

どういう事かというなら原作であるＳＡＯならプレイヤー名はローマ字で統一されていたのだがこのβ版は普通に入力が可能になっている事だ。

具体的に言えば俺のプレイヤー名がそれに当たる『一方通行』と入力する事が可能だったのだ。

どうやらＳＡＯの本格起動後に全世界のプレイヤーがアクセスすれば自分とは違う国のプレイヤーにはローマ字表記になるらしい

これは後にＶＲＭＭＯというジャンルを世界に広げる為のデータ採取であるらしい。

それに加えて同時に瞬間翻訳機能も仮実装されているらしく町中ではそのテストの為にこのゲームの中にダイブしている製作側の人間にも出会った

しかし理由は恐らくそれだけでは無いだろうと俺には確信があった…理由は俺が見たＳＡＯの紹介文の一つ

『世界初のＶＲＭＭＯ！！『２人の天才』の共同製作により遂に完成！！』

そう、このＳＡＯの製作は本来なら『ナーヴギア』の制作者である『茅場晶彦』の手により行われた筈だ『２人目』などは存在しない筈なのだ

この改変は恐らく『イレギュラー』による物に間違いは無い。
つまりこのＳＡＯは始まりから既に『本来のＳＡＯ』とは違う物になっているのだろう

そんな事を思いつつ俺は今日もこの長門とイレギュラーを探しこのゲームの中を探索している。

あの後、『桐ヶ谷和人』こと『キリト』と俺達はそれなりに行動を共にしているのだが、今はイレギュラーの探索が優先な為にわざとキリトが来そうな時間とずらしている

「つーかよォ…長門ォ」

「何？」

「このＳＡＯの中のイレギュラーってのは具体的にどンな感じで現れンだァ？」

俺は気になっていた事を聞く為に草原を歩いていた足を止めた。

そう、俺が気になっているのはイレギュラーの事である。

βテストな事もあり攻略ペースも緩やかな為にあまりというか未だにクリアされたのは第三層までであり、俺達も散策の為のレベルアップが必要な為に調べようにも詳しく調べられず未だにゲームの中ではイレギュラーに只の１度も遭遇していないのである…故に俺は気になっていたのだ

「この世界にないアイテムや人物…分かりやすく言うなら貴方が知っているゲームの中の登場人物やアイテムが紛れ込んでいる…らしいよ？」

「そォか」

因みに長門の奴だがあの日以来ずっとこの性格のままである。何か能力を使った時とかにあのヒューマノイドインターフェースという機械的な性格に戻るのかもしれない…現にこいつはこの性格になってから1度も戻ってねェからなァ…

「具体的には……？」

「……なンだァ？」

長門が説明しようとした時に何か爆発音らしき物音が聞こえてきたので周囲を見渡していると長門がある方向を指差した

「あんな感じ」

「あァ、なるほど…ってマジかァ！？」

長門が指を指している方向を見れば確かに異常な光景だと分かる風景が広がっていた。

何故ならそこにある景色の中にいる俺が目にしたそいつは雰囲気こそは違うがつい最近倒したこの階層の門番と同じ…つまり明らかな『ボスモンスター』の雰囲気をもつモンスターが草原の一角にいるのだから…しかも

「ちィっ…誰か襲われてやがる…行くぞォっ長門！！」

「え？襲われ…いや、そうじゃなくて…」

俺の背後で長門の奴が何か言っていやがるが俺はそれを無視して鞘から剣を抜き放ち走り出した

◇

「くっ…」

「うっ…なんで術が使えないの！？おまけに武器も動かないし！」

「分からないわ、だけど…この状況は不味いわね」

私と仲間である彼女は突如として飛ばされてきたこの場所で突然現れた大型の魔物に襲われていた

「このっ！！……駄目だー！ねぇ！やっぱり全然発動しないよ！」

「そう…どうなっているのかしら…」

彼女は主に魔術や武器を銃の様にして戦う…そのどちらも使えないとなると私1人でこれの相手は…

「うっ…おらァアアア！！！」

「へっ！？」

「なっ…」

どうしたものかと考えていたら突然私達の背後から漆黒の影が飛び出し魔物へと斬り掛かった

「おィ、お前等！大丈…なァッ！？」

その飛び出してきた影の正体である剣を構えた青年はこちらへと近寄ってきた…しかしその顔を見て私達は驚いた

「「ゆ、ユーリ！！？」」

驚きの中で私『ジュディス』と『パスカル』はその顔を見て同じ人物の名前を叫んだ

◇

なァアアア！？なんで此所にこいつらが…って、そういう事かよクソッタレ！！本来なら居ない筈のこいつらが居る…つまりこいつらがイレギュラーって訳かよ！！

「×××！！」

「長門っ…」

急いで追いかけてきた上に俺の目の前にいる大熊型のボスモンスターを見て相当焦っているのだろう俺の本名を叫びながら走って来た

「周囲と空間を一時的に切り離し改変しつつ貴方に掛けられた『制限』を一時的に外す！その力で一気に倒して！！」

「ハァッ？『制限』？『力』ァッ！？」

「あ…∋∪▼○£§TΣPH‡∞∞　ΦΦXMΞΠΠP」

俺の疑問の言葉やジュディスやパスカルの叫びを意にも介さず目を閉じたかと思うと次の瞬間には超早口で普通の人間には理解不能なコードを喋りだすのを切っ掛けに俺と長門の姿が変化し始める長門の姿は今や成長した『涼宮ハルヒ』の世界に居たセーラー服姿へそして俺はというと…

「そォいう…事かァっああ！！」

そう、俺の姿はＳＡＯ内でのユーリの姿から現実世界の俺の…紛れもない『一方通行』の姿となっていやがった更に長門の言葉の意味も理解したつまり今の俺は全てが正真正銘『一方通行（アクセラレータ）』その者になっているという事だ

右手をそえつつ首をコキコキと慣らし目の前のボスモンスターを絶対的な強者となった俺は鼻で笑いながら高らかに叫んだ

「さァ、来いよ弱者ァあ！！最強の超能力者の力って奴を見せてやンよォおっ！！」

そう叫び終わると強者(オレ)は足下の『ベクトル』を操作し弱者(ボスモンスター)へと突っ込んで行く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0942r/

この架空の大地で

2011年8月22日10時11分発行